

宗像市にある東海大学福岡短期大学は、2018年3月にその28年の歴史を閉じました。情報処理学科・国際文化学科の二学科からなる同短大は、IT・語学・観光・スポーツ・地域振興など、多岐にわたる分野において、地に足のついた、まさに教職員の顔が見える地域活動を展開されてきました。地域からはその閉学の決定を惜しむ声が多く聞かれています。

同短大の閉学により、その最後の学長を務められました神山高行先生をはじめ、多くの教職員の方々がこのむなかた地域を離れることとなります。その別れを前に、神山学長から、むなかた電子博物館へのご寄稿を頂きました。東海大学福岡短期大学のむなかた地域に対する貢献に感謝を示しつつ、掲載させていただきます。どうもありがとうございました。

むなかた電子博物館紀要委員長

## とりとめもなく

東海大学福岡短期大学

学長 神山 高行

専門：近代英文学（シェイクスピア劇）

「降る雪や明治は遠くなりけり」、あまりに有名なこの句は、俳人中村草田男が1931（昭和6）年、30才の時に詠んだ句です。昭和に入り、古き良き時代として明治、大正が遠のいていく郷愁を詠ったものとされています。昭和が平成になると、これを模して、明治は昭和に置き換えられ、「昭和は遠くなりけり」、と昭和への郷愁と同時に平成への批判も暗に込めた標語のように昨今あちこちで詠われるようになりました。その平成もまもなく終わろうとしているわけですが、平成生まれも「平成は遠くなりけり」と詠う日もそう遠くはないかもしれません。いずれにしても、古きを懐かしみ、新しきに戸惑いを覚えるのは、人の常でありましょう。冒頭の句が浮かんだのは、50代も後半になりますと、ふと自分の人生や時代を振り返ることもあり、またここ宗像市にある、私が勤めている短大が今年の3月を以って閉校となる事情も手伝いまして、寄稿を承りましたこの紙面では、とりとめもなく、思いつくままに頭を過った雑感のようなものを書き進めていくことになろうかと思えます。まとまりもなく、結論もなく、落ち着く先もわかりませんが、どうかしばしお付き合いいただけましたら幸いです。

簡単な自己紹介めいたものから始めます。私は1961（昭和36）年の生まれで、少年期を平々凡々と日本の高度経済成長期の真ただ中で過ごしました。戦後生まれの方々が団塊の世代と呼ばれ、1960年代後半の大学紛争真っ盛りの頃、私はまだ小学校3、4年生でしたが、大学生のお兄さんやお姉さんがいる、ませた級友たちがクラスを扇動して〇〇先生の授業はボイコットだといって、教室に机や椅子でバリケードを築いたのには驚かされた記憶があります。中学生にな

ると、当時の社会や世相を反映してか、何事にも無気力・無関心を表す“しらける”という言葉が流行し、私の世代は、しらけ世代、あるいは断層の世代と呼ばれるようになりました。長じて、大学生の頃には、当時の中高年世代から感性や価値観、行動規範の相違により“新人類”と呼ばれました。個人的には私よりも2、3年後輩の人たちに最も当てはまる呼び名ではないかと思いますが、まあ、世間とは何かと時代や世代に呼び名としてレッテルを貼るものです。いつの世代の人も自分の世代がそう呼ばれていたことに確かに納得するところもあるでしょうし、いや、自分はそうではないと思うところもあるでしょう。それは人それぞれというところでしょうか。

さて、前置きが長くなりましたが、私と宗像との出会いは、東京で数年間、大学と高校で英語講師を経た後、1993（平成5）年、東海大学福岡短期大学に勤務することになったのがきっかけでした。本校は、情報処理学科と（私が所属する）国際文化学科の2学科を擁する男女共学の短期大学で、前身の東海大学工学部福岡教養部（1966－1990）の後を受けて、1990（平成2）年4月に開学しました。短大が開学した当時、世の中はまさに高度情報化社会と新たな国際化社会が到来しようとする時代でした。その後、情報化においては、瞬く間にパソコンや携帯電話をはじめとするICT機器が社会に浸透してゆき、国際化においては、国際社会は国際化からグローバル化へと名を変え、今や情報化とグローバル化は現代社会を表すキーワードとしてあらゆる分野において頻繁に使われる言葉となりました。一方、国内では少子高齢化が急速に進み、社会問題として様々な分野に影響を及ぼし始めました。とりわけ、少子化である18歳人口の急激な減少は、教育界にも大きな変化をもたらすことになりました。本稿の冒頭にも触れましたように、私の勤務する短大は今年度を以って28年の歴史に幕を下ろすことになるわけですが、そこには個別の事情はさておき、大学全入時代や女子学生の短大離れ、専門学校との競合など、短大をとりまく様々な環境の急速な変化が関係しています。短大の減少について数字を用いて状況を簡単に紹介しますと、短大への入学者数は1993年度の24万人をピークに減少の一途をたどり、2017年度にはおよそ5万6千人と25年の間に4分の1以下となりました。短大の数も1995年度の596校をピークに2017年度には339校と大きく減少しています。因みに、大学入学者数のほうは、短大の入学者の減少とは逆に、1990（平成2）年度の49万人から2017年度はおよそ61万6千人に増加。一方、大学数においては、1990年度の507校から増加し続け、2012年度には783校とピークを迎えましたが、この年を境に大学数も減少に転じ、2017年度は777校となっています。大学の入学者数も18歳人口の減少にともない、今後は減少に転じると予測されています。

以上、数字が端的に状況を物語っていると言え、それまでですが、短大教育に関わった現場の人間としましては、経済的メリットも含めて就学年数や実務教育の重視、卒業後の進路選択肢の多様さなど四年制大学とはまた違う短大ならではの特色や強みがあり、まだまだ何らかの活路があるのではないかと考えています。将来的展望や経営的観点から撤退を余儀なくされる全国の短大が後を絶たない状況の中、短大の復活には、制度としての改革も必要ですが、何よりも短大を魅力あるものにすることが最も大事と言えるでしょう。もちろん、それが容易にできれば苦労は

しないのですが…

どうやら、話の方向は短大教育に関することへと向かっているようですので、ここからは、私が短大で、勤しんでまいりました英語教育と担当したある教養科目についての雑感と感慨めいたものをご披露して本紙面の責務を果たしたいと思います。まずは英語教育についてですが、長年にわたり英語を教える立場ながら、英語という外国語を教える難しさを痛感しつつ、試行錯誤しながら学生に満足のいく授業を提供するためにこれまで英語教授に従事してきたつもりです。しかしながら、結局のところ、英語（語学）の修得というのは、いわずもがなですが、学習するものの目的意識と努力次第ということが大きく学習効果に関係していると言えるでしょう。短大での英語の授業のガイダンスの際にアンケートをとりますと、およそ 9 割の学生が英語の必要性に同意しています。その理由は、現在の国際化・グローバル化時代において英語は必要だから、あるいは、将来、国内外での仕事などに役に立つからといった理由が主なものです。確かにそうですが、これらはごく一般的な理由づけに過ぎません。実はここから先が教員の役目で、英語学習の意味付けやインセンティブをいかに学生たちに与えられるかということが大事になってきます。そして、学生が英語を学習するにつれ、学生自らが具体的な英語学習の目的やゴールを設定するようになれば、しめたものです。ある意味、経済学の需要と供給が合致したところに適正な経済効果が生まれるように、英語教育も同じで、学生が求めていることと教員が与えられることがうまくいけば、よりよい学習効果が生まれるものと思われまます。

思えば、日本の英語教育は、明治以来今日まで、様々な紆余曲折を経て、現在にいたっています。戦後から 1960 年代までの英語教育の大衆化、1970 年代の英語教育界で話題となった平泉・渡辺論争（実用英語を重視すべきか、あるいは知的教養としての英語を重視すべきか、という論争、一もちろん、実用も教養もどちらも大事です）、1980 年代の目的別英語教育の提唱と推進、そして 1990 年代から現在までの国際化・グローバル化への対応を視野に入れた英語教育の構築というように、様々な変遷を経てきました。現在、文部科学省は「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」に従い、小学校、中学校での英語の学習指導要領が 2020 年度から刷新され、新たな英語教育カリキュラムが導入されることを視野に入れて、既に一部の小学校では、2018 年度より、これまで小学校 5、6 年生で行っていた英語（外国語活動）を 3、4 年生で行うことが予定されています。2020 年度以降は、小学校 5、6 年生で英語が正式な教科となり、これまで中学校で行っていた授業内容をある程度小学校までにやっつけてしまおうということになりそうです。そして中学校からは、基本的により対話的な授業がオールイングリッシュで行われ、高校ではディベートができるレベルまでの英語を学習させるという構想です。もちろん、早期からの英語学習は言語能力の発達と獲得の面からいっても理にかなっています。私自身も早期から英語を学習させることには異論はありません。しかし、生徒の適性も考えずに、必修として一律的に学習させることには疑問があり、逆に英語嫌いを生み出す結果になりはしまいかという懸念もあります（短大でも、中学や高校で英語が嫌いになったという学生の声をよく聞きます）。それから教員への負担や適切な教員を配置できるのか、また他の教科への影響、特に国語（日本語教育）

が疎かになるのではないかと、という意見が英語を小学校で教科化するデメリットとして考えられています。

ここからもう一つの話題に繋がりますが、私が短大で担当した、ある教養科目についてお話しします。こちらはある意味、日本語教育に関わる問題となります。短大で「文学と歴史」という科目を担当して20年余り経ちます。内容は、専門の英文学をテーマとしていますが、いわゆる一般教養の科目になりますので、あまり専門的にならないように、作家のエピソードや映画化された作品の画像などを講義の中に盛り込みながら、文学の楽しさや面白さを伝えること、また兎角、難解なイメージに誤解されがちな文学というものが、実は意外と社会や生活の中で私たちの身近に存在している、ということを知ってもらうことを目的として講義を展開してきました。おかげさまでこちらの目的は、学生による授業評価の感想などからみても概ね達成されているようです。こちらの目的と言うからにはもう一つの目的があるわけですが、それは本講義を通じて、（日本語で）読書する習慣を身につけてもらう、というものです。私の世代も既に先生や親から、本を読まない、と言われたものですが、携帯やパソコン、ゲームや様々な映像機器が溢れた時代に育った現在の学生の世代では、本を読まなくなったのも無理のないことと言えるかもしれません。しかし、人の思考力というのは、いつの時代も、活字を目で追って内容を頭の中にインプットすることにより、鍛えられ培われるものであることには違いありません。読んだ本は課題として、学生から読書感想文という形で提出してもらっていますが、この10年で、学生の感受性や鑑賞する力についてはさほど変化はないものの、それを表現する日本語の語彙力や文章力は確実に落ちてきているように感じます。表現したい感情や主張したい意見を言葉に置き換えられない、というのはたいへんもったいないことです。読書する習慣を身につけてもらう、というテーマは今後も様々なところで継続していきたいと考えています。読書と読書感想文をセットにして、日本語による思考力と表現力を如何に向上させていくかが今後の課題です。

唐突に終わり申し訳ありませんが、以上、とりとめもなく、綴ってまいりました。冒頭でまとまりもなく、結論もなく、落ち着き先もわからないと言っておきながら、教員稼業に従事するものの悪い癖で、あえてまとめさせていただきますと、短大事情、英語教育の問題、読書と日本語教育への雑感と感慨ということになるでしょうか。このへんで筆を置かせていただきます。

末筆となりますが、宗像の地で長年にわたり大変お世話になりました。感謝の気持ちでいっぱいです。そして歴史と文化と自然豊かな宗像にとっても愛着があります（2017年「宗像・沖ノ島と関連遺産群」の世界文化遺産への登録、誠にありがとうございます）。宗像の今後の益々のご発展をご祈念いたしております。